2022年日本建築学会賞（作品）
選　考　経　過

第 1 回の作品部会は 2021 年 10 月 1 日に 10 名全員オンライン出席で開催された。規程、申し合わせ、審査方針を確認し、さらに委員と関係の深いものの業績が候補となっている場合には、当該委員はその業績の審査に参加しないことを確認した。特に今年は候補作品の設計者と同じ組織（企業、大学）に所属する委員は審査から外れることとした。またコロナ禍の審査については昨年同様、緊急事態宣言が出た場合は審査をしないことを原則とした。その結果幸いにも宣言は発出されず審査は全て予定通り行うことができた。また重賞対象となる候補者が含まれていたが、受賞に値する作品である場合は重賞を妨げないことを確認した。

第 2 回の作品部会は 2021 年 10 月 8 日にオンライン出席者を含め 10 名全員出席で開催された。前回議事録の確認をし、委員が所属する組織の作品、6 作品について、当該委員は審査に参加しないことを決定した。審査方針の事前確認を踏まえて、全ての応募作品について資料を縦覧したのちに、全委員での議論と複数回の投票によって審査対象の 46 作品から下記の 9 作品を選び、現地審査を行うこととした。

① 旧富岡製紙場西置繭所
② まちのような国際学生寮ー神奈川大学・栗田谷アカデメイア
③ 武蔵野クリーンセンター・むさしのエコ re ゾート
④ 長野県立美術館
⑤ Good Job! Center KASHIBA
⑥ 屋久島町庁舎
⑦ マルホンまきあーとテラスー石巻市複合文化施設
⑧ 須賀川市民交流センター tette
⑨ 太田市美術館・図書館

現地審査は 2021 年 11 月 14 日、12 月 5 日、11 日、18 日、19 日、26 日、2022 年 1 月 16 日、計 7 回行った。審査は視察 2 時間、質疑応答 30 分を原則として公平に行われた。最後の審査日にはトンガ沖の海底火山噴火による津波の影響が心配されたが、無事に審査を終えることができた。

最後の作品部会は 2 月 2 日に行われた。新型コロナウイルスオミクロン株の感染が拡大したが建築会館ホールで離隔距離を十分にとって全員出席のもと行った。審査は先ず全審査員の審査基準を明確にした上で最初の記名投票を行った。そこで投票数が相対的に少ないものを除き議論を行い、再投票を行った。その結果投票数が相対的に多い二作品を決定し、三作品目を更に深く議論をし、最後の投票を行った。その結果下記 3 作品を本年の日本建築学会賞（作品）に決定した。

・旧富岡製紙場西置繭所
・長野県立美術館
・太田市美術館・図書館

なお、惜しくも賞に漏れた現地審査作品の講評を以下に示す。

・まちのような国際学生寮ー神奈川大学・栗田谷アカデメイア

日本での大学寮が安価な居住空間を提供するものにとどまることが多いなか、吹き抜けの中に「ポッド」と呼ばれる居場所を点在させることで、学生同士の交流が自然に生まれる空間が生まれていました。多様な設えを持つポッド群がつくる三次元的なコモンズの風景は大変に魅力的でしたが、吹き抜けを居場所化とすることに起因する内装制限的な材料の偏りや環境制御の限界に、理念をマテリアライズする際のハードルの高さを感じました。

・武蔵野クリーンセンター・むさしのエコ re ゾート

約 50 年ごとに設備更新による移転が必要という清掃工場の、同一敷地内の移転で、市民が環境問題に触れ、まちとつながる施設を目指す。クリーンセンターは臭気と騒音の制御に多大な配慮をしつつ、ゴミ処理施設の心臓部を回廊で見学するガラス張りの清掃工場で、ゴミピットの中を上下する巨大なクレーンバケット、旧施設を耐震補強し使用した煙突など創意演出もあり、清掃工場施設の見える化の成功事例である。災害時機能維持の為の設備機器の制震対策がないなど核心においてやや浅薄な印象がある。エコリゾートは、旧施設の一部を市民のオープンスペースとしている。鉄筋コンクリート構造の断面の見せ方は造形的に秀逸である。

・Good Job! Center KASHIBA

平屋の木造建築が千鳥壁の操作（南棟）や、スロープや建具（北棟）でゆるやかに分節され、複数の福祉事業の混ざり合いや、やわらかなつながりを感じ取れる多様な居場所づくりに成功している。また、趣の異なる２つ建築がそれぞれ角地に立ち、あらたな街の風景をつくり出している。ものづくりやカフェを介してさまざまな市民や利用者が共在する場所の豊かさを、現地審査でも共感できた。優れた施主との対話を通じて実施案をつむぎ出した、設計者の柔軟な創造力も高く評価したい。

・屋久島町庁舎

世界中で持続可能性への取り組みの重要性が高まるなか、建築家のこの社会課題への責任は重い。屋久島町役場は、地元木材を活用し、島内の大工・職人の手で作り、手入れしながら 100 年以上維持できる建築の実現に取り組んでいる。森林資源の活用による林業・製材業の活性化、木造技術の継承にも貢献している。建築形態は、国内最多の年間降水量と台風、塩害、白蟻など、過酷な蒸暑地域環境のなかで育まれた建築の所作を踏襲しながら、樹木のような魅力的な建築架構を島の加工技術で実現している点が特徴的である。惜しくも学会賞（作品）の選には漏れたが、社会における建築家の責任と職能を示した秀作である。

・マルホンまきあーとテラスー石巻市複合文化施設

運動場や空地の目立つビジネスパークの只中に、被災した市民会館と文化センターを複合して再生するこの施設には、歩行者優先のまちづくりのなかでの役割が強調される現今

の文化施設のあり方は当てはまらない。この作品はその難しさを、20m の高低差のある祝祭的な内部路地と蜃気楼のような存在感で超えている。展示、劇場、フライタワーを直列したヴォリューム断面を、正面に数メートル押し出すだけで、これらを手に入れた手法は、目の覚めるような鮮やかさを示す一方、揺れに対する仕上げの挙動についての懸念も残した。

・須賀川市民交流センター tette

図書館、障害学習、子育て支援、ミュージアムなどの複数の機能、情報と活動が有機的に融合された市民交流センターである。メガストラクチャーによって分節されたスラブをセットバックさせながら積層し、その操作によって生じる内部の吹き抜けと外部のテラスが特徴である。吹抜は市民の活動を視覚的につなぐ空間、テラスは街に向かって活動する場となっている。吹抜の温度成層の抑制、テラスに面するサンルームへの熱のカスケード利用など、建築計画とエネルギー削減の高度な環境統合が見られた。